虚子記念文学館投句特選句・令和四年八月

稲畑廣太郎　選

句縁とも人の縁とも今朝の秋　京都　西村やすし

星流る六甲掠めまたひとつ　兵庫　小杉伸一路

星飛んで闇に傷跡なかりけり　石川　辰巳葉流

流灯の涙色してとどまれり　東京　宮村土々

新豆腐水の余白のありにけり　兵庫　岸川佐江

蝉時雨村の小さき石仏　奈良　堀ノ内和夫

箸先の重き残暑の夕餉かな　兵庫　高市敦之

新涼や館にのこれる師の思ひ　神奈川　進藤剛至

秋の水とび跳ねてゐる水の黙　兵庫　辻田あづき

読みかけのギリシャ神話や星祭　兵庫　武田奈々

（青少年）

入選句・令和四年八月

夏風邪の夫大袈裟でわがままで　兵庫　中井陽子
後ろ手のバトンは宙へ大夕焼　大阪　櫻淵桜陽子
解夏の僧ぐいと目深に網代笠　兵庫　武田優子
新しき心と身体なる夏明　徳島　奥村　里
あれもこれも過ぎしことなり墓洗ふ　香川　葛原由起
星祭紙縒撚り方まづ教へ　大阪　西尾浩子
打ち上がる花火と君の頬の照り　兵庫　山田将大
夏館汀子師今も在すごと　香川　真鍋孝子
日盛に出かけるといふ重装備　京都　山﨑貴子
汀子邸みな涼しくて懐く　香川　三宅久美子
上を向く朝顔明日も明後日も　大阪　多田羅紀子
虚子館に蟬時雨抜け蟬時雨　兵庫　藤井啓子
門火焚く魂のゆらゆら吸はれゆく　兵庫　高橋純子
鈴の音に鎮もる汀子邸の秋　鳥取　前田　千
秋立つや何かが違ふ気配して　兵庫　深尾真理子
星月夜おのころ島の酒醸す　兵庫　辻　桂湖
夾竹桃親には見せぬ通知表　兵庫　永沢達明
初秋の歩幅大きく歩す川辺　兵庫　玉手のり子
諷詠とあらば猛暑も何の其の　兵庫　岩水ひとみ
山気澄み夏明の寺鎮もりぬ　兵庫　中村恵美
案内する塩辛蜻蛉里の道　奈良　豚々舎休庵
館員の声掛け優し昼寝の爺　東京　櫻庭　寛
守宮かな歩のさま可笑し威されて　三重　水越晴子
俳礎の増えゆく庭や秋涼し　兵庫　長安悦子
子等満る三年振りの茅の輪かな　兵庫　小川孝子
主人待つ更地に残る桔梗かな　東京　木村三球
師の陰を偲び偲びて秋の蝶　兵庫　福田光博
盆の供華水かへてより急ぐ句座　兵庫　岩鼻絹子
師の在さぬ遺愛の庭や秋の蝶　新潟　安原　葉
計画の進む庭影涼新た　兵庫　奥田好子
鹿跳ねて天気予報は今日も雨　兵庫　太平楽太郎
御仏のこころ身籠る涼新た　京都　杉森大介
百日紅子ども広場に咲き残る　兵庫　伊集院秀樹
ひそやかに秋風抜ける邸の庭　兵庫　二瓶美奈子
小暗さを抜けてさ揺らぐ風は秋　兵庫　清瀬　環
木々渡る風の高さや秋進む　兵庫　英賀美千代
季題みてきこふ空耳庭の秋　兵庫　細田清子
蜩の鎮もる庭の夕間暮　兵庫　日下冨貴子
帰省子を迎へ深夜の窓明かし　兵庫　キートスばんじょうし
暑き日の暑さの上にまた暑さ　石川　辰巳昌彦
まだ燃ゆる鉢百日紅健気かな　神奈川　小林　心
しがらみの弾けよ飛べよ鳳仙花　兵庫　三木雅子
盆の川魚捕るなと祖父の声　兵庫　山﨑渺美
縦笛を吹く子にはじけ鳳仙花　兵庫　大西美知子
鳳仙花はじけし先をふるさとに　兵庫　山口弘子
昭和の景残る通りや鳳仙花　大阪　辻　昌子
盆の月掬う手水舎揺れてをり　兵庫　道中義臣
新盆や吾子追ひ逝きし老猫よ　兵庫　ほりもとちか
ままごとと石蹴りの路地鳳仙花　兵庫　金田八江子
音頭取じよじよに飛び入り増えにけり　兵庫　山岸正子
遠目にはそつくり姉妹鳳仙花　兵庫　入谷千惠子
汀子師を館に偲びて盆の月　兵庫　川村ひろみ
乗鞍の空に現る銀河かな　兵庫　岡本泰志
秋涼し昨日忘れて白湯を飲む　兵庫　足立朱麻
大夕焼垂るる蓮の花托かな　神奈川　小堀公美子
鰡飛ぶや水面に揺るる常夜灯　愛知　小野　薫
浮きいでし肋を数ふ残暑かな　神奈川　平野孤舟

鰯雲水平線の彼方まで　石川　伊東弥太郎

聞き留めしかなかなのこゑ風に消ゆ　兵庫　田村惠津子

送り火や送る相手の名は知らず　兵庫　菅原一真（青少年）

散髪の頭気にする残暑かな　兵庫　阿曽宏之

獅子雲に漕ぎ出す小舟瀬戸夕焼　滋賀　近江菫花

願ひ事ひとつに硯洗ひをり　神奈川　金子三奈乃

九十九折霧にライトの乱反射　和歌山　中島紀生

秋立つや旧本陣の味噌饅頭　埼玉　土井洋子